

趣旨説明

高 谷 好 一

この重点領域研究では、東南アジアそのものの性格解明に各班が当たっているが、このB03班だけは、むしろ外との関係から東南アジアの輪郭を浮き彫りにしたいという意図があり、地域間研究の手法をとっている。南アジア、中東地域に引き続き、今回は「中国と東南アジア」を企画してみた。この研究会を開くに当たり、濱下さんから与えられた助言は「華南・東南アジア」という地域設定を考えてみてはどうかということだった。従来、中国は北を中心に論じられ、東南アジアもまた北の中国の周辺という捉えられ方がされてきた。だが、むしろ華南を中心に、華南・東南アジアという地域を設定することが、中国史においても正しくはないか。それによって地域全体を見る視野も開けるのではないだろうか。そこで、今回は「中国」あるいは「東アジア」の立場から問題提起をしていただき、我々東南アジア側がそれにコメントするという形で進めていこうと思う。

発表していただく前に、あらかじめ我々が東南アジア側で議論してきたことから、いくつかのキーワードを出しておきたい。30年程前には、東南アジアは「中国とインドの子供」と言われていたように思う。だが、それだけではないはずだ。東南アジア研究センターの自然科学者から、東南アジアには「熱帯多雨林多島海」があり、それを踏まえた「生業」があるのではないかという、「生態」からの議論が出された。その後、家島さんの海域研究と関連して、「東南アジア海域論」が盛んになってきたが、我々はそれらの内容を豊富にする意味で「小人口世界」あるいは「圈的発想」という要素を打ち出してきた。圈的発想とは、小さな光源がいくつかあり、バウンダリーがはっきりしない、領域的ではないような世界と言えるだろう。その小人口世界を支える組織原理としては、「述語的論理」ということが立本さんから出されている。

このようなことから考えられる範囲は、生態、歴史、社会と、極めて広いだろう。だが今回は、我々がまだ考え及んでいなかった華南・東南アジア圏の実態を中心に考えてみることで、この研究会は少しまとまるのではないかと思う。ただし、それだけにしぼるつもりは毛頭なく、広いアスペクトで考えていいたいだろう。最終的には、東南アジアとはこうだと明解に言い表せるようにしたいというのが主な趣旨と言えるだろう。